川崎市立小学校体育研究会

川崎支部研究だより

２０２３年１１月吉日

川崎支部授業研究会

１１月１５日（水）に、渡田小学校にて川崎支部授業研究会が行われました。子供たちが夢中になって運動に取り組む姿が見られました。授業の準備をしてくださった渡田小学校の職員の皆様、お忙しい中参観いただいた皆様、ありがとうございました。

授業後の研究協議では、活発な意見交換がなされ、研究を深めることができました。そして、講師の渡部陽子先生からは、授業をするうえでの貴重な助言をいただくことができました。以下、多くのご意見、ご感想をいただいた中で、主だったものをいくつか紹介いたします。

研究協議　〇感想や意見、質問　　●質問に対する回答、授業者及び支部より

授業者４年生　表現運動　表現（福田　竜慈　先生）

題材について

〇どういう意図で、題材を選んだか？

●場面や出来事をより想像しやすいものにし、動きにつなげられるものにした。

〇題材からどんな特徴を捉えさせたかったのか

●ねらっている動き（引き出したい動き）例：とぶ、這う、回る等…　を題材から引き出したかった。すべてのエリアで表現を行うことで、ねらった動きを行えるような題材設定とした。支部では「這う」動きや「ゆっくりとした」動きは出にくいのではと想定したので、海中エリアを設定した。

動きについて

〇海中での表現は「這う」動きが多かった。その中で立っている子に価値づけの言葉かけを行っていた意図や表現するスペースに跳び箱の１段目を置いていた意図はあったのか。

●海中エリアで「泳ぐ」表現を行う際、「這う」動きがほとんどだった。違う動きに着目させることで、表現の仕方を広げたかったが、難しかった。跳び箱に着目させすぎると、そこに集まってしまうことが想定された。安全に行う上でも、そこまで価値づけしなかった。

〇止めて集める機会が多かったように思う。どんな意図があったのか。止めて集めてしまうことで、こま切れになってしまう様子があった。表現を行う上で、イメージを広げることが大事ではないか。題材とのかかわりの中でイメージをどう広げていったのか。イメージマップが掲示してあったが、どのようにして作っていったのか。また、イメージカードを手立てとして活用していたが、どの程度具体にして書くのがいいのか。

●伝える時間、動く時間を大切にしたかった。よい動きに注目したり、友達の動きのよさを見付けたりすることを重視し、集めて共有を図った。イメージマップは単元の１時間目に作成した。それぞれのエリアのイメージを抽象的にとらえるための手立てとした。イメージカードは、子どもたちがやってみたいと思う場面を取り上げた。動きにつながるように具体的な場面を設定した。ジャングルエリア、海中エリア、テントエリアで動きを網羅したいという支部の考えがあった。

ひと流れの動きについて

〇支部として、「ひと流れの動き」をどのようにとらえていたか。授業の中で、子供たちがどんな動きをしていたら OK だったか。いろいろなことを求めすぎたのではないか。「２コマ漫画」としてとらえていたとしたら、２コマ目の動きとして、どのようなものを想定していたか。即興的に踊る上で、いろいろなイメージカードを拾って、書かれた場面を全身で表現できるようにしてもよかったのではないか？即興的とはあるが、「見てー考えてーやってみる」というものでも十分なのではないかと考えている。

●支部としては、「ひと流れの動き」を「２コマ漫画」と考えている。（例：「〇〇していたら、△△になっちゃった」）一息で動ききれるものを「ひと流れ」としてとらえた。題材ととらえて踊ることを意識した。本時は海中エリアだったので、海中ならではの動きを求めていた。イメージカードによって、２コマの動きにメリハリを付けられるようにした。

学習サイクルについて

○「即興」は「安心感」がある中でないと成立しない。安心感を大切にした支部の考えは賛成。学びのサイクルとしての見通しとは？

●「こうなると、こうなるはずだ」と子供自身が考えられるような学習を設定していくことが大事。

　アンケートでは表現運動を「好きでも嫌いでもない」と答えた児童に着目していたが、授業では楽しそうな様子が見られた。見通しをもちながら学習できたからではないか。見通しをもち、めあてをもてるようにすることが大事。時間をかけて、ようやくめあてをもって取り組める実態になってきた。学びのサイクルとして、めあて学習が充実していくためにふり返り方についても工夫した。児童の実態を考慮し、どんな動きをしたかをふり返る際には文だけでなくイラストも許容した。

指導講評 講師：渡部　陽子　先生　（川崎市立小学校体育研究会副会長　南加瀬小学校 校長）

◎「やってみたい」と思わせる授業だった。

表現について

・表現は学級経営がそのまま出る。実態によっては「即興」と「ふざけ」が曖昧になったり、学びが実感できずに終わってしまったりすることもある。
・子供側に視点を向けると、運動の得意・不得意があまり影響しない単元である。
・一人一人がクラスの中で安心して表現できるかが大事。

授業について

・経験が少ない実態の中で、安心感を大切にした授業づくりだった。体と心をほぐす運動を取り入れ、仲間づくりを行えるようにしていた。
・手立てとして取り入れたイメージカード。内容を子供たちに教えるのかという驚きはあったが、カードに書かれた一つをみんなでやってみることで、安心感につながった側面もあった。
・渦にのみこまれる動きをペアで行う→一人一人行う→グループで行うとしていたが、子供の実態を考えると必要な時間だった。
・動きの価値づけのタイミングが少し早かったように思う。子供たちが表現する動きにもっと浸れる時間を確保してもよい。
・次時にはイメージカードの種類を増やしたり、動きに浸れる時間を確保したりするとよい。
・支部の考える「ひと流れの動き」のとらえはよい。その上で、子供たち同士が動きや表現方法についてもっと話をしてもよいのではないか。
・見通しをもつことはできていた。子供たち同士が話をする中で、イメージを共有したり広げたりすることができるようにしていくことが大事。
・動きをやってみる→めあてをもつということを大事にしていたのがわかった。
・見学の子にも見る視点を与えていたことで、授業に参加することができていた。
・動きを広げる上で、高低差を意識できるようにするとよい。高低差を意識するには「頭の位置」を変えることを指導したり、引き出したりするとよい。
・表現は「人に伝える」ためのものではない。やっている自分が全身で表現することに没頭できるような授業をめざしていきたい。

担当・文責：御幸小学校　粕谷　祐介